言葉の裏に見える偏見

マイクロアグレッション(microaggression)という言葉があります。直訳すると「微細な攻撃」となります。

この言葉は、1970年代にアメリカの精神医学者が提唱したものです。元々は、マイノリティ(少数派)の人々へ向けた言動の中に、攻撃性が認められることから生まれた言葉で、マイノリティに対して悪意や偏見をもって行う言動とされました。

その後、マイノリティに向けてだけでなく、人との関わりにおいて、意図的であるなしに関わらず、相手の心にちょっとした影をおとすような言動をしてしまう、といったような意味にも使われています。

なぜ、マイクロアグレッションが相手を傷つけるのか、それは言動の背景に、性別や人種、文化、障がいなどに対する偏見による価値観や固定概念が含まれていると考えられるからです。

例えば、

「ブラジル人だから、サッカーやりますよね。」

「徳島の人なら阿波踊りが得意だよね。」

といった、ステレオタイプな見方による発言などです。これらの言動は、ほめているようにもとれますが、ブラジル人にもサッカーが苦手な人もいるし、徳島県人だからといって、必ずしも阿波踊りが得意だとは限りません。少し考えてみれば当たり前のことです。仮にサッカーが苦手なブラジル人や、阿波踊りの苦手な徳島県人にとっては、先の言動によって傷つく可能性をはらんでいます。もちろん、他にもたくさんの事例があり、自分の言動で人を傷つけてしまったかもしれないという経験は誰にでもあることでしょう。

マイクロアグレッションは、差別の一種であるとされています。しかし現実には、発言した人が「差別である」という意識がないということが多々あり、先の例のように、相手をほめている、認めていると思っている場合も多いのです。

また、こうした隠れた攻撃性に気付き、それを指摘した人が、「考えすぎ」「スルーしたら」「そんなに気に入らないのなら関わるな」などと逆に攻撃を受ける場合も起こります。さらに、差別だとは見えにくい言動だからこそ、多数派の人は無視できるという不公平さも存在しています。

日常生活において、相手を傷つけることは誰しも本意ではないと思います。これを防ぐには、ありふれたことですが、「この言葉は失礼に当たらないだろうか」「興味本位で質問していないだろうか」などと、発言する前に一度考えてみることです。これを習慣づけることによって、自分自身の中にある偏見に気づくことが出来るかもしれません。気にしすぎると言いたいことが言えないと感じる方もいるでしょうが、相手を傷つけて後悔するよりましではありませんか?。

何より一番大切なのは、相手を尊重する気持ちをもつことだと思います。相手は自分と同じ人権を保障された人であるという、当たり前だけど忘れてしまいがちなことをいつも心に留めておくことではないでしょうか。

市教育委員会生涯学習課
人権教育推進室(新教育庁舎2階)
☎32・3814
FAX33・1230
Mail:jinkenkyouiku@city.komatsushima.i-tokushima.jp

市民文芸　花みずき歌壇　(397)　松並敦子・選

ゆさゆさと稔りの稲穂を手に取れば実の張り良くて黄金色なり　赤石町　田原トシ子

義経が馬にて駆けし小松島わが車にて跡を訪ねる　中田町　多田　健児

一生のうちに何度か巡りくる大きな節目を乗り越えられるか　田浦町　太田カツミ

脱ぐときに不意にあなたの匂いするクリスマスイブの白いセーター　金磯町　川下　年男

停年を控えその後の人生は色鉛筆のようだと思った　立江町　湯浅かや子

もう霜月　暦を捲る風冴えて今年も残り少なくなれり　田浦町　西　教明

電線に雀?いえいえ百合鴎、神代橋から川面を覗く　松島町　萬野　行子

病院を探しつつ行く町はずれ鳩がついばむ精米所前の米　江田町　深田　伴子

小松島図書館ふれあいコンサート本も聴いてるギターの心音　横須町　山﨑　泰子

寝苦しく目覚めてみればモフモフと人の顔から暖をとる猫　間新田町　瀧川　益美